

「上田秋成と明代文人の「茶癖」——江戸文人の煎茶嗜好について」

一、はじめに

上田秋成(1734~1809)は江戸時代中後期の大阪の読本作者、国学者、および煎茶家で、号は余斎、無腸、剪枝畸人である。秋成は学識豊かな人で、漢学、国学、連歌、俳句、医学に長じ、代表作には『雨月物語』、『春雨物語』などがある。晩年の秋成は文雅養性の技事である煎茶を嗜み、『清風瑣言』、『茶痕酔言』などの煎茶書を著した。特に『清風瑣言』は日本での早期の煎茶関係の作品として、江戸時代の文人間で広まった煎茶文化の形成に重要な役割を果たしている。現代の煎茶道にも中国的な文人趣味の特徴がまだ残っていて、これも『清風瑣言』の影響と言える。



上田秋成像

秋成の煎茶について、小川後楽を始めとする日本人研究者は多くの研究成果を得た。しかし、これまでの研究は、上田秋成の煎茶書への理解が不十分な部分が多いと発表者は考えている。特に日本の煎茶文化と中国茶文化の関係性を究明する研究が不足しており、残念なことに秋成の煎茶への理解をより深めることができなかつた。

以上のことから、本研究の注目点は以下の二点である。一点目は、秋成の煎茶が中国の茶文化とどのような繋がりがあるのか。二点目は、秋成の煎茶観の本質は何であるか。まず、秋成の煎茶書の特徴を整理し、その上で中国明代の文人の「茶癖」との関連性を含めて考え、秋成の煎茶観の核心である「清」の本質を考察する。

江戸時代の煎茶書一覧表 (部分)

| 和暦   | 西暦   | 著者  | 書名                                   | 冊 | 付注          |
|------|------|---|--------------------------------------|---|-------------|
| 享保十二 | 一七二七 | 三谷良朴                                      | 和漢茶誌                                 | 三 |             |
| 宝暦五  | 一七五五 | 売茶翁                                       | 梅山種茶譜略                               | 一 |             |
| 六    | 一七五六 | 大枝流芳                                      | 清湾茶話                                 | 二 | 京都・佐々木平八等刊記 |
| 八    | 一七五八 | (唐) 陸羽<br>附刻…<br>(宋) 審安老人、(明) 孫大綬、(明) 顧元慶 | 茶経<br>附刻…茶具図贊・水辨(煎茶水記等)・茶経外集・茶譜・茶譜外集 | 二 | 金澤・能登屋次郎刊記  |
| 一三   | 一七六三 | (明) 夏樹芳<br>売茶翁<br>大典類常聞                   | 茶童<br>売茶翁偈語                          | 三 | 浪華・木村兼葎堂刊記  |
| 明和元  | 一七六四 | (清) 葉隼<br>大典類常補                           | 煎茶訣                                  | 一 | 寛政八(一七九六)序刊 |
| 安永三  | 一七七四 | (唐) 陸羽<br>梅園歌口<br>大典類常注                   | 茶経詳説<br>考茶録                          | 二 | 多くの中国の茶書を摘記 |
| 八    | 一七七九 | 梅園歌口                                      |                                      | 一 |             |
| 寛政六  | 一七九四 | 上田秋成<br>沢田実成                              | 清風瑣言<br>煎茶略説                         | 二 | 浪華・木村兼葎堂刊記  |
| 一〇   | 一七九八 | (清) 劉源長                                   | 煎茶史                                  | 二 | 清湾茶話の改題     |
| 享和元  | 一八〇一 | 大枝流芳                                      | 煎茶仕用集                                | 二 |             |
| 二    | 一八〇二 | 柳下亭風翠<br>柳下亭風翠<br>曾占春                     | 煎茶早指南<br>売茶翁煎茗書<br>附刻茶寮図贊            | 一 |             |
| 三    | 一八〇三 | 附刻…大蓮詩仏                                   | 煎茶樵書                                 | 三 | 京都・小川源兵衛等刊記 |
| 文化一  | 一八〇四 | (明) 俞政                                    | 茶集                                   | 一 | 京都・林喜兵衛     |
| 二    | 一八〇五 | 増山雪斎                                      | 煎茶式                                  | 一 | 京都・小川源兵衛    |
| 四    | 一八〇七 | (清) 陳元輔<br>上田秋成                           | 枕山樓茶略<br>茶譜・茶経外集                     | 一 | 浪華・木村兼葎堂刊記  |
| 文政六  | 一八二三 | (明) 孫大綬、(明) 顧元慶<br>木村兼葎堂                  | 茶譜・茶経外集<br>売茶翁茶器図                    | 一 |             |

## 二、本論

### 1、上田秋成の煎茶書の特徴

- ①中国茶書の喫茶法を積極的取り入れる。（清）陳元輔『枕山楼茶略』等
- ②中国茶書の内容から和歌創作の着想を得ることを試みる。
- ③従来の点茶文化を批判することによって、新たな煎茶文化を樹立する。

※「清」の意識は秋成の煎茶書を通して一貫している

### 2、明代文人の「清」の意識

明代の文化的商品生産の主体は主に三種類あり、文人階層、官僚階層（士大夫）と商人階層である。三者は互いを参考としながら、模倣し合い、競い合っていた。明代の文人達は士大夫と商人との競争の中で主導権を確保するため、自らの独特な審美眼を標準化する必要がある。明代の文人の考えでは、士大夫は腐敗した官界に汚され、商人は拝金主義的な市場に親しんでいるので、二者とも「清」の境地に到達できない。「清」こそ文人固有の特質なので、他人には安易に真似できない。そこで、明代文人は専ら「清供」、「清玩」、「清賞」などの「清」の行為を行うことで、意図的に商人、士大夫と自らの区別をつけ、個性と脱俗性を主張した。つまり、「清」は官僚や商人のような俗人には存在しない、文人独自の天性なので、これを以て自身の優位性を示すことができるとしている。

### 3、「茶癖」と「清」の関係

明代文人の考えでは、「癖」（即ち嗜好）は人間性の深みの象徴で、人間には不可欠なものとされ、「癖」の重要性を強調する。「癖」を通して「清」を確認することが可能である。「清」は「癖」に内在する。「清」という性格は、お茶と人間の中に共に存在している。しかし、「清」は誰でも容易に見つけ出せるわけではない。そこで、煎茶を通して、お茶における「清」（茶の趣）を会得することができる。煎茶における「清」に対する共感を通して、自身に潜在する「清」（人間性の善）の存在を確認することができる。

### 4、上田秋成の「清」の意識

晩年の秋成は「清」を好んで俗人を憎み、誇り高く剛直な性格のせいで周りの人に敬遠され、畸人と呼ばれた。彼は煎茶に志向を寄託して、我が道を行く個性を示した。秋成は煎茶の趣は「清」にあると考えたが、彼の提唱した「清」は人の生まれつきの本性のことを指していた。点茶は人間の純粋な感情を抑え、故に煎茶でない人間の本性を表すことができない、と秋成は考えた。これは明代文人の考え方に由来するのであろう。

## 三、結論

### 1、秋成の煎茶は中国の茶文化にどのような影響を受けたのか。

秋成の嗜好した煎茶は陸羽の『茶経』を始めとする多くの中国茶書に影響を受けた。特に、明清の喫茶法を集成した『枕山楼茶略』に受けた影響が大きい。したがって、明清の喫茶法と共通点が多いことが秋成の煎茶の特徴である。

その点も、秋成の煎茶が日本従来の点茶と一味違っている理由である。

また、秋成は中国の茶書から着想を得、和歌創作に工夫を凝らした。

### 2、秋成は煎茶に何を求めているのか。

秋成は煎茶に内在した「清」の所在を求めている。秋成が煎茶に「清」が内在することを意識したのは、明代文人の「癖」（いわゆる嗜好）における主張に由来するかもしれない。

明代文人は士大夫と商人との激しい競争の中に、持続的優位性を確保するため、嗜好の重要性を強調する。「清」が「癖」の中に存在し、「癖」を以て人間としての本性の純粋さを示すことができると主張している。つまり、「癖」は「個性」の一種である。

秋成にとって煎茶は「癖」であり、俗を離れた自己の個性を示す手段である。